



近世説美史年表

1279
108



1279
8

時細おとせ花る一

近世説美少年録第二輯卷之三

東都 曲亭主人編次

第十四回

苦雨初霽て残花春は遇ふ
 樂地空しくぞ赤繩更に較糸ぐ
 再説彼武士の友人と共侶小酔し候鯖樓とせし時獨猛小立帰く
 主人を招き其程一夥多武士の俟小沼堪も嗤ひ言や倭燈と扇拍子を
 會ふに河原小添ゆくも隨小回遙まなりよけり。有如之程は是首の密中相譚
 済し又遠く立出外小跪居る後者とええりて誘とまら小前路入小追若ん
 とく走りたるこれ生醉本性紊い。腰小帶る両口の刀小諸のけはは靴脱らせ
 トとせいのる下。既小く疾鯖樓中。の日亨心小暇ある折主人の妻と身邊小招れり
 御小彼客小いれり。緯如此とると耳に示して你との談を何とせよとせと試み然る



胸の向ふ。輝成るくいの折れ。これ媒妁しては下。この女房合笑く。如
 びくものぬ。商量で侍ら。摠ては彼子の為る。ふ若の言け。いふこれ。自今
 召く告ゆらん。おの共の。めを。捷徑で侍ら。と。いれて主人の。幾遍と。うら
 領を。定然然。今宵と約束せられ。今ゆふ猶豫。あ。う。あ。の。如。く。召。せ。ぬ。
 ゃ。う。う。と。急。けり。その時阿夏。天井。る。是方の柱。身と倚。飽。客。の。浮
 られる。酒の酔。醒。く。と。既。小。王。鉾。のみ。を。ら。あ。り。ま。る。と。妖。艶。な。花。の
 今。も。の。衰。れ。の。国。三。月。の。遅。樓。若。葉。に。恥。ぬ。風。情。あり。斯。暇。あ。ら。ぬ。役。使。の
 了。髪。を。忙。し。け。れ。走。来。く。や。阿。夏。さ。あ。御。室。さ。の。召。ゆ。め。さ。く。あ。家。の。納。戸。の
 ぞ。ま。る。を。と。の。を。阿。夏。の。う。う。と。と。う。ち。揃。う。何。の。を。え。と。同。せ。も。あ。ま。さ。れ。が。と。何
 ぞ。か。ん。知。ら。れ。は。れ。と。お。お。く。本。と。い。れ。り。と。い。ふ。阿。夏。眉。を。蹙。め。常。中。あ。ら。ぬ
 主人夫婦。お。召。ろ。と。あ。ろ。ろ。が。う。愆。ま。つ。覚。ぬ。も。吐。ら。る。あ。あ。と。あ。め。め。め。め。

と。難。て。馳。く。納。戸。へ。赴。け。り。登。時。あ。の。女。房。の。良。人。を。え。く。の。声。を。潜。り。て。喃。阿。夏
 と。の。今。呼。せ。り。家。の。分。付。然。り。と。も。餘。の。美。お。け。む。些。些。商。量。の。は。る。や。あ。る
 た。と。他。事。も。く。側。に。招。け。近。づ。け。て。人。の。あ。ろ。も。ま。し。知。ら。ぬ。媒。妁。め。る。言。ふ。か。裏。に。え
 身。を。呼。登。り。た。る。両。箇。の。阿。客。の。武。家。ご。う。ん。ご。中。の。年。紀。三。十。あ。ま。り。と。お。い。さ。の。い
 さ。小。家。を。其。に。お。い。さ。の。根。穿。す。葉。を。欲。す。回。さ。し。は。隠。ま。す。と。有。は。ら
 依。り。報。ひ。し。彼。人。竊。ひ。嗟。歎。し。と。と。痛。ま。る。の。の。渠。の。の。身。を。う。ら。任。し。と。
 人の妻。あ。る。ま。く。欲。せ。つ。れ。娶。ら。ん。と。思。ふ。の。美。を。相。譚。ひ。ひ。と。繰。返。し。正。首。の
 憑。れ。あ。ひ。も。あ。と。吾。侪。の。如。今。時。は。り。あ。ん。の。あ。ろ。の。あ。と。と。同。れ。て。阿。夏。を。沈
 吟。た。る。肚。裏。お。も。さ。う。こ。が。才。千。辛。萬。苦。と。あ。の。地。へ。来。つ。の。陶。ぬ。珠。之。女。と。女
 ん。と。お。い。さ。の。あ。れ。い。ふ。情。願。画。餅。と。う。く。あ。よ。う。の。絶。果。は。い。又。誰。か。為。し
 節。操。と。守。り。と。一。生。涯。を。行。心。つ。た。と。い。ふ。と。け。い。ま。ま。も。あ。ふ。よ。る。の。あ。ん。と。あ。ん。

人小あつて。吾侪のまれば。珠之成が為のり。推辞のするも人の底
 意の測りのあり。と問質して後をそと深念と。頭を擡て。必ひ子息婚縁の
 みの執持のする。と耳よりの然び。然と宿所も告られ。名さへ氏さ定り。三
 ら。初見参の酒。奥の兼せ。浮る言。信はま。との小主人。膝推向け。あれが
 こそ。そののれ。俺をも彼客人を何処の誰と知らざれば。今こそ妻の説。示さる。一
 條の。まの。媒。好。ま。死。る。る。ね。も。且。皆。後。段。あり。扱。彼。人。の。の。ま。下。其。渠。を
 け。初。く。眷。恋。の。ま。頼。む。ふ。あ。と。渠。の。舊。縁。あり。相。別。れ。り。既。ふ。と。や。
 十。稔。あ。ま。の。ふ。る。う。い。づ。心。とも。る。面。忘。れ。て。迭。ふ。知。ら。ず。あ。け。る。阿。夏。と。の。名。心。は
 び。く。熟。視。れ。看。る。隨。ふ。を。れ。る。と。と。あ。り。あり。渠。の。ふ。く。あ。の。地。の。來。く。又。歌。妓。の
 ろ。り。や。え。ん。問。ひ。疑。ひ。解。ら。り。と。あ。ひ。ふ。け。れ。と。席。上。大。く。醉。ふ。屋。友。人。あり。て。便
 宜。を。言。ふ。れ。黙。止。り。あ。を。猶。疑。ふ。渠。云。云。と。い。ふ。あ。は。れ。ら。の。よ。と。傳。へ。ら。れ。り。

あひ合まるゆあへ。と。い。へ。る。の。推。辞。を。く。その。美。い。あ。ら。ゆ。い。へ。も。阿。夏。の。給
 角。多。男。見。あり。博。労。町。の。安。店。の。今。る。月。を。客。僦。の。債。も。ま。り。あ。へ。る。
 美。い。の。め。と。問。せ。も。果。て。彼。人。莞。尔。と。う。ち。笑。て。を。聊。の。數。の。ま。つ。の。り。を。美
 引。く。左。も。右。も。せ。ん。術。あり。ん。と。誘。へ。る。あ。り。これ。の。宿。所。へ。立。り。り。今。宵。亦
 來。く。回。答。を。皆。ん。只。管。憑。心。む。と。い。れ。り。有。如。之。者。酒。奥。の。兼。され。浮。る。言。ゆ。い
 あ。へ。く。と。と。あ。ふ。よ。り。て。つ。が。妻。よ。り。と。告。商。量。一。と。言。の。あ。ま。及。ぶ。之。以。是。你。の。為
 ぬ。も。が。む。と。妻。ゆ。め。の。れ。れ。も。あ。り。と。後。々。ま。の。吉。凶。の。神。る。衣。身。の。測。り。の。り。み。つ
 折。小。回。り。定。り。あ。は。ゆ。べ。し。然。る。頼。り。人。る。と。お。ん。媒。好。と。願。ひ。け。り。との。余。夫。婦。と。欵
 ひ。く。る。不。彼。人。の。噂。と。ま。れ。影。さ。ま。窓。の。梅。の。花。春。の。横。目。の。暖。光。黃。昏。近。く。る。ふ

けり。却説阿夏の退き。さるるのうさるるも。おひ難る。彼人の舊見縁のあり
 とも。おれは。什麼誰るけん。初京師の在り。時纒。お二度酒宴の席での
 けれる。客多る。欽近江の人。知らねども。今も。さるる何処で。中ん。さるる一人の面影
 る。その名おひ出ぐ。おれ。この違のま。さるる名告。おひ。然る左のん
 右の。身の憂事。さげの。櫛髪。其の後毛。搔揚て。人さる。縁の。化粧鏡。の。目
 借物。さるる。向とも。影暗。日。没果。燈火。の。あ。届る。片。あ。る。る。為。お。貯の
 坐席。送りの。蠟燭。も。流れ。渡りの。牙。あ。れ。と。さ。る。る。日。と。曆。さ。る。茶碗。と。番。復に
 糸底。お。建。く。彩る。屑。燕脂。の。餘色。も。香。も。知。る。人。あ。る。さ。る。る。の。所。為。さ。る。けり。
 春の。夜。さ。れ。短。くて。さ。る。る。樓。上。お。客。も。さ。る。る。の。戸。御。さ。初。更。の。比。彼。客。ぬ。さ。る。る。來。に
 けれ。主人。の。さ。る。る。あ。る。る。で。且。了。髪。お。案。内。を。さ。さ。て。矮。樓。お。登。り。茶。と。薦。め。又。盃。を
 勧め。けり。あ。い。奥。ま。り。る。漏。室。あ。る。只。一。基。さ。る。燭。臺。の。と。趣。あ。る。心。地。ら。さ。る。れ。と。

彼の客のあら。酒のあ。ね。さ。る。主人。の。出。く。さ。る。何。と。ひ。けん。阿。夏。の。面。答。さ。る。ま。く
 けり。この。さ。る。さ。る。岩。越。さ。波。の。連。歌。の。額。の。画。と。瞻。仰。て。俟。程。お。主人。の。さ。る。る。一。碟。の
 炙。雞。金。と。と。登。り。さ。る。あ。れ。を。彼。客。の。さ。る。る。さ。る。る。あ。ん。約。束。で。お。い。へ。魚。肉。の
 既。お。用。竭。く。聊。野。菜。の。遺。さ。る。る。の。外。い。ゆ。も。一。度。過。さ。さ。る。る。量。お
 竊。お。頼。ま。さ。る。る。絆。の。趣。と。送。も。さ。る。阿。夏。の。お。い。へ。身。ひ。さ。る。さ。る。と。子。推。携。て
 他。御。お。流。浪。へ。は。れ。さ。る。舊。見。縁。に。あ。る。さ。る。と。娶。ら。ん。と。宣。い。の。轍。の。駒。に。お。放。さ。れ
 枯。る。苗。の。雨。お。あ。る。幸。い。と。は。れ。さ。る。あ。ん。戲。さ。る。と。思。ひ。は。れ。さ。る。さ。る。る。さ。る。る。び。お。目。お
 じ。さ。る。さ。る。さ。る。と。生。口。お。あ。る。さ。る。郎。の。素。生。も。お。誠。心。も。定。さ。る。知。せ。お。い。さ。る。推。辞。は
 ら。ん。や。と。如。此。さ。る。さ。る。と。さ。る。さ。る。れ。這。意。と。さ。る。さ。る。と。昔。さ。る。さ。る。と。彼。客。の。膝。の
 進。む。骨。ぬ。さ。る。さ。る。一。言。お。母。お。志。さ。る。感。謝。お。堪。さ。る。さ。る。と。然。る。さ。る。の。お。見。斯。遠。お
 絆。救。生。の。畢。竟。足。下。の。有。功。さ。る。心。祝。の。不。世。と。い。つ。ら。さ。る。辞。ひ。さ。る。主人。の

そが伏受戴せし。傍にお向く。髪も半分盛て喫む程の肴ある。等々。制
 めくも。懐より圓金一枚取り出し。鼻紙を載け取り。物得て怒る人
 られが推辞するも。是を受て。歎ひを述す。壽を返す。彼一條
 云云と目今。首尾を阿夏とて。在下。その涙。腕を去。其の
 冬より呼ぶ。と。拵つて。これ。一。胡盧。一。対。薄命人。火。願
 願。の。と。り。傍。を。の。子。の。冷。つ。湯。更。と。あ。れ。せ。い。こ。こ
 ぞ。立。心。と。急。先。立。と。歩。下。の。紙。屑。拾。あ。り。態。現。生。活。小。脱。落。る。日。調
 ち。も。八。調。又。一。挺。の。蠟。燭。の。真。文。截。退。り。け。春。の。宵。の。夢。と。覚。て。果。敢。る。も
 立。浮。名。の。十。稔。り。果。け。ん。面。影。を。認。れ。よ。草。枕。客。宿。結。小。妹。と。仗。の。縁
 一。も。神。の。隨。意。と。花。さ。さ。む。も。浮。萍。の。浪。の。う。へ。根。を。絶。て。誘。小。水。と。よ。る。べ。の
 岸。と。人。の。心。も。嶋。通。鳥。の。瀬。る。の。西。東。さ。て。往。方。を。張。の。か。さ。阿

夏が細骨の瘦ええを。梳けたる。片。小。銚。子。推。り。登。る。階。子。左。裨。合。る
 だ。も。う。び。太。織。の。今。の。暗。衣。の。昔。の。房。衣。端。磨。目。ご。帯。の。真。折。隠。せ。ど。聊。死
 燭。基。と。徐。と。引。退。く。背。を。陰。小。上。坐。る。客。對。ひ。ら。ち。微。笑。て。宛。約。束。の。違。せ
 め。で。今。宵。と。て。来。す。れ。銚。子。と。更。々。と。ま。あ。り。ぬ。不。盡。と。抗。ひ。の。こ。り。ま。て。客。も
 笑。い。け。小。喃。阿。夏。奮。主。人。の。信。ら。れ。る。信。の。回。報。の。詳。し。け。ん。認。り。及。中。で。あ。る。こ。と
 これ。持。病。の。逆。上。の。よ。り。去。歲。の。春。も。秋。ま。も。大。く。顔。瘡。を。患。へ。主。君。の。姑。く
 暇。と。賜。り。有。馬。の。温。泉。浴。と。ら。辛。く。と。愈。え。れ。る。ま。ま。疥。迹。の。耗。れ。り。面。の。り
 あ。く。忘。れ。れ。ん。ぬ。れ。が。信。と。薄。情。と。恨。ん。由。る。ぬ。の。う。彼。陶。氏。を。送。ら。し。る。人。の
 情。深。草。る。茶。店。の。首。尾。を。忘。れ。放。と。の。れ。く。阿。夏。の。驚。き。を。客。の。言。で。つ。く
 つ。と。ち。目。成。り。且。恥。て。原。来。お。ん。の。陶。氏。の。親。く。参。り。あ。る。日。野。西。の。病
 侍。辛。踏。取。と。さ。る。故。と。阿。夏。と。ち。笑。く。然。る。辛。踏。无。四。郎。を。ね。ら。し。る。

とわろし小妻時辭も奈未と民の甲斐ある今宵の再會小疾如初の疑は勿心地
 解一迭の法元四郎の猶声を微めく喃阿夏優と十の稔ふる良の地へ來つ
 良人小伴れ西首の子共を携て鎌倉へと啓行ぬと人の噂も傳ふるよの地へ來つ
 るの陶氏小再あると思ひらん彼木偶女のいふまゝに継子の小夏は恙なき故アそ
 わらぬのふぢやと問ふ阿夏は涙をこぼして薄命なる年の來の艱難劬勞を
 告まらざる心なむと面を俯れも花の浴衣住ひて立平比足引の山押する異様
 雄のそと禍莫くあむ路ゆく木偶女の彼小夏は命をさるるなり妻の小測力力を
 免れて尚仙珠之女と鞠も育一千辛萬苦の言一朝小盡りぬりて介後情
 あり里人の家小身を富せ去歲まで其処小住りあり舊里より京師へ歸心し
 親類もかん身中知られる情由もはれぬ陶女小あま珠之女が久後をいふと
 路遙遠盤纏をければよ小任せよとの空を年艱難めらうとや及ぶ情願

稱さる本甲斐もあまの地小在る臍左界の戦ひ敗るる破敗
 沈まると風の便りも笑え折る方もなき歎きと俱小死すといひしよ
 馬をれ残る世小盤纏も物も空しく為用盡くせ術を人の情も欺
 船は憂身小室津海の底より深き宿世の罪障哀れをいひぬといひて
 よと泣沈め死四郎も亦嗟歎とよも倍る你的薄命とて慰むるも
 陶氏の陣歿のれも京師と世の風声小傳へばくぞ知る小小這回の地小
 來つは是私の所要もあむ迺玉君のいん使也天内殿年始の佳儀を述
 せざるふよとく御向小共侶もあむ酒の遊び一人ハ萬里小路小房
 卿よりこれ亦大内家遣されり使也某甲と呼ぶる旅立る俺と一
 所をれ彼人の大く酔く還ると軀を熟睡する小町宿るれは居も易く
 秋のふよ小伴をも俱せぬといふと來つは小京師小在る時相見ると日

阿夏落魂市粥曲子圖

出像第十九 此の圖前卷小漏た
るを補ふ本文と異之

擬攻 桃園 結孔懷 須知天 意巧安排 乘時事業轟天地 未遇身名困草萊 貪裡光陰情不已



難中知遇果奇哉 從今母子分 夷雒 回首 雲山 天一涯 あふと涙ふ たえ縁を 因防ぢふ 旅のよむまふ 糸柳乃名



多うと云ふに西三回過つた。この折中を心掛けて世を生かす男子たるの斯美く
 風流なる女子を取ると云ふは彼十五城の易々たる事と云ふに似たり。折中を
 新参の殿住ひるは京師の若くは歌妓の良人をとりて愛し一花を
 かりて折中を企及せんとす。多う絶く在ける陶氏を情由あるに
 深草の園に生れし御子の吾侪果ては縁草の真意ありて身は擲入の
 別れの哀らるる想像するに及引く。身を陶氏の値せし老嫗親切に飲れる。
 只一朝の情ありて是有る而後良人と共他御を棲住せし人傳へ愛せし
 りて恋の絶果てて在るに似たり。妻も娶らるる親の陸奥の校布の御の
 御事ありて農業を旨とせしむるに似たり。京師の若くは歌妓の良人をとり
 親の親中熟くして京師に陸奥の所縁ありて兼頭卿に仕まつるに似たり。
 敵多く主君幽在るの身を立るとも似たり。昔里の年々おぼせし事と

昔里の昔里田舎の優よめはゆの捨ごとて今茲及び。雖然も親の齡七十を
 越ゆ。何時までも在る。下は故郷へまゐる。親の心を休めんとす。去
 去歳の冬主君よりせせせとて身暇を請せしむ。然あつて明春大内家
 年始の使と勤て後々昔里へゆれぬ。その年耆老実の磨は仕へられども知
 ぞ。不如意あるれ取らば。その美明春別紙をて周防へ頼り遺さ
 京兆をり。必賜りある。其言の要なきをいひて。呻吟制めあり。有る事
 泰く御意を隨ひたり。故郷へ云々と君命を傳知らし。春立朝の霞を
 當國主は由緒なく。萬里小路路房卿の使と共侶に京師を去りて。日
 日這地の著たる。鶴ヶ峰を城の到りて主君の消息を呈し。まは
 城下の旅亭に退き。且つ逗留し程。ゆき城の中に召入れ。國主の目を
 入らば。則ち報翰を遞与され。折中を義をりて。思召し言あるよめ。其

折紙附るゑん刀と時服一襲お沙金五十両を添く賜りて是併り君の
 宛計ひおよものまれば時の面目おの身お餘りし給ひまうし退りぬればおの
 地の所要果る。君隔翠の比去らぬとく賢房卿の使と勾當の
 する程お彼お使のりりい垂柳橋の邊おを名くは酒樓ありとぞこれ京師の
 裏お誘ふ今より其処お赴なく。俱お酔い盡さべしとらるるも亦路の向寄お
 所要おれ共侶お旅亭をせよ。あま来くおれ果しと違つて客歌妓さありと
 りい召登くと絃歌を聴くおその面影お声さあへ置屋阿夏およ宵をそれら
 ありぬお進止まらるるけいおその名を夏と呼ぶればいよく違つたりとぞ
 ろるるも乱酒の最中一親る人お憚おれ樓上おの目も果さば。又お門より立
 戻りて主人お問へば良人おあまを珠之友とら呼ぶる。獨子あり他所をる。阿
 夏お流浪の顛末お箇様々々と報られらる。あま至てうら疑ひの半分お解け

春の雲おれくも水と人の往方の定めき。東路中とのまを西の都お在
 明の月お優ておひき。十稔絶お恋風の復這浦お起んとら身中お憐
 妻おあまを相譚よめて縁と結ぶ。舊里へおくおいらんおまはれれば些お擬議
 甘んぶ主人を媒妁せとて娶んとら。一日の浮氣おんや赤心おその
 折おまを你お知せん。とぞひい美のおれお陶氏のうかお俺も一面の交りおれお悼
 ありぬおあまおぬも逝者お日お疎く流る。水お去て返らぬ你年来彼人を思ひ
 如く今よりと吾儕お誠お天中お地お折言を立く後の世も夫婦おる
 らん後ら飲甚麻を。と問つて口説つ風流士お風流女子お色深お情を花お
 咲散らまら死相譚ひお阿夏お遺る瀨る感涙を稍拭ひ斂を頼
 るる辛踏ぬ。然らばおれお否とららる辞船の目取上の川お遠く
 ぬその陸奥る舊里へ伴んとまを告えぬ神をひける誓言お十稔の眞愛お

慰め侍の然けれども伯勞町客店に債あり。珠之次も彼怨ふ侍と云ふ
 去死と問せもあまの義も心安のべし。御向主人の云云と告られよと既に
 去。その方寸は分別あり。これ幸ひ大内殿より賜する金あれば客儀の債を
 償へし。又珠之次の你と共小京師を返りて還りて。介后亦せん御あふんや
 今より五目見とと昔里ねくも。數一めぬりま。如右より。かてあり。
 親の理強は古代氣質の翁なれば。この這面主君より賜する女房もといひ
 瞞ゆる障あり。あられ総角子さある。婿婦も死と告まうさ。外聞も妙
 る。親も戲けぬ。のど怒りて口舌れも起せぬ。然るとは。此の為の。珠之
 次。の為も。さ。因て且渠がうへ生君願ひなり。姑く京師を遣。措。緩。る。か
 家。小。召。さ。し。腹。料。は。是。の。と。さ。と。這。面。你。を。伴。小。賢。房。卿。の。使。と。共。侶。の
 還りぬ。吾。侍。の。病。小。假。托。と。且。彼。人。を。急。と。出。遣。ら。ん。と。い。ふ。る。あ。の。義。も

後を。の。べ。と。い。ふ。阿。夏。の。秋。ひ。く。緯。送。も。た。あ。身。の。計。小。京。師。の。去。昔。里。を
 は。珠。之。次。を。那。里。小。留。め。く。豫。て。知。れ。な。る。西。の。御。家。嫌。頭。小。賢。房。を。仕。ま
 つ。し。の。り。陸。奥。の。憚。の。関。の。門。鎖。を。許。さ。れ。流。れ。ぬ。か。ま。は。り。も。妾。心。を
 安。が。り。る。霜。の。松。子。雪。の。松。左。も。右。も。の。愛。顧。の。浮。世。春。小。遇。し。の。親。の。そ
 る。と。渠。も。亦。幸。ひ。を。は。ら。め。と。瀧。心。む。言。兼。の。露。の。間。も。最。華。爾。身。小。相。譚。小。折
 り。忽。地。階。子。の。麟。む。音。も。主。人。と。ぬ。え。ひ。階。を。あ。の。奈。何。那。を。商。量。の。整
 ひ。て。飲。と。同。く。圓。居。小。入。る。程。小。阿。夏。の。急。小。席。を。讓。す。鈍。ま。り。親。方。さ。る。
 去。の。お。客。の。京。師。る。日。野。西。さ。の。御。内。人。幸。踏。ぬ。と。呼。ぶ。お。素。も。由。縁。の。侍
 せ。お。顔。瘡。の。迹。耗。む。と。面。も。ま。あ。の。か。ん。或。は。て。は。り。ぬ。と。い。ふ。又。无。四。郎。と
 猛。小。辭。を。更。め。く。只。今。阿。夏。が。報。う。如。く。吾。侍。の。兼。頭。卿。の。お。使。を。奉。り。當
 國。主。へ。參。向。さ。る。幸。踏。无。四。郎。寧。成。の。主。用。も。緯。果。た。れ。阿。夏。母。子。と。相。伴。ん

との帰京の商量決著る。深き素より脱れがた由縁のたよありける。相別
 さまより十稔の選小信絶えぬ。窮乏を極小由る。さのすも知らぬ。あ
 一不幸ひして資られ。和殿の気感する。ふあまのあり。ゆらりる。報ひる。ま
 とも噂る。ぐもあさる。旅のあれ。思念。任させ。陶氏在京たり。時友垣縮び
 へり。えあれ。懐舊の長談。あまを小夜を深たり。とのま主人。ぬて。原
 京家のあ使用する。刀衿。ゆくり。然る。方。さる。知。て。大。無。礼。を
 仕ぬ。彼子。あまを。挿。せ。ろ。も。本。銭。を。容。る。の。も。あ。ら。ぬ。誰。の。謝。義。を
 受。ぬ。幸。あ。る。よ。か。と。飲。の。こ。呼。愛。と。祝。ひ。復。不。盡。を。勸。れ。無。四。郎。始。笑。
 坪。入。り。阿。夏。と。共。献。の。酬。れ。つ。ぬ。と。不。盡。と。巡。り。程。お。ま。真。夜。中。に。り。
 無。四。郎。の。別。を。生。て。客。舎。小。更。ら。ん。と。ひ。ける。を。阿。夏。の。ゆ。と。主人。も。林。あり。路
 次。の。程。心。り。る。今。宵。の。小。更。の。ひ。て。翌。日。未。明。小。更。ら。せ。ぬ。と。い。ふ。も。憎。る。

素より望む所ある。有。敷。系。早。後。以。難。て。幾。回。と。ま。さ。ま。あ。ら。ぬ。あ。ら。ぬ。あ。ら。ぬ。
 その。議。の。任。け。の。時。了。鬘。の。皆。睡。り。呼。べ。も。人。の。事。の。め。る。け。れ。主人。入。り。あ。ら。ぬ。
 や。不。盡。盤。の。斂。め。辞。去。ら。阿。夏。の。臥。簀。布。儲。け。無。四。郎。が。為。枕。哉。
 薦。之。絶。て。久。た。怨。思。の。快。樂。を。曉。る。天。を。恨。ま。け。り。烏。犀。痴。る。故。這。狂。漢。譬。
 論。の。り。と。箴。と。ま。彼。花。を。偷。む。が。為。の。枝。を。折。る。の。己。が。身。の。先。枉。る。を。思。
 至。然。れ。海。人。の。股。を。辟。け。ん。の。珠。を。藏。ま。る。為。の。瞽。女。の。脛。を。踏。み。その。蚤。を。
 拂。か。が。為。の。人。を。て。これ。を。笑。へ。も。その。醜。體。を。羞。む。思。小。道。且。舊。う。陶。器。を。
 愛。む。の。の。の。欠。を。瑕。と。甘。む。好。ま。敗。衣。を。買。ふ。の。の。新。衣。を。の。妙。と。甘。む。
 飽。温。の。飢。寒。を。差。次。に。名。利。の。事。を。真。愛。る。ん。皆。感。入。の。是。筆。を。と。り。と。
 性。に。世。の。迷。惰。の。病。あ。ら。の。の。善。悪。の。差。別。小。園。く。驕。日。恭。け。能。い。の。の。の。
 その。身。を。忘。ま。す。他。の。惡。を。皆。ま。く。欲。ま。人。の。嗜。慾。の。さ。め。ぐる。阿。夏。が。恥。る。

いふも足らぬと元四郎が事を好む。世の捨物を据へ居る彼迷情の病も
ほと敗衣を好む被抜と稱へ且その直の廉を堀出しの類をばへし。

第十五面

青蚊厄を釋く子母故御小還る
黄門情を察しと艶童西家小留る

却説辛踏元四郎の黎明の比旅亭小還りて竊小臥簟に入らる。一夥
るは使者のかくとも知らず。起る元四郎を呼覚ま。豫て計りし元四
郎答て不占某の昨宵より酷く腹痛ま。水瀉まをくりければ通霄寐も
睡られざる憶ふまの宿醒ゆる軽症あるべし。兩三日も保艱甘んば長
途の旅行心もさ。然りとて定めある帰京の日期も。困りて御邊も後ま
ぬんを。緯の宜なるあま。俺も春念せ。ま。歸路小赴たぬと。小件の
使者眉を擡めて。その心憂るふるん某を用ひぬ。於城中へと告ぐ。醫

師と招く。元とを元四郎。昨夜あま某のふ貯あり。醫師を請ふ。及ぶ。ん
各々主君の為小ま。御邊熱小拘づら。猶豫せ。あ。と。あ。俺心安
く。願ふ。ま。帰京。俺郎中の雜當。連へ。と。傳達。あ。ひ。あ。外君
免る。を。れ。ま。あ。至。ま。と。速小本復。遠。く。た。趕。著。く。俱。ま。京。師。還。り
て。ん。あ。ま。を。あ。ら。る。ぬ。ひ。て。ま。の。り。の。理。り。ま。れ。ど。沈。吟。し。て。領。を。く。俱。小。京
師。と。出。る。ふ。一。夥。の。病。臥。と。ぬ。り。捨。く。歸。途。と。急。ぐ。心。を。朋友。の。義。小。背。ふ。似
た。れ。ど。私。の。旅。る。ぬ。主。用。る。と。の。い。せん。某。醫。師。は。あ。ら。ぬ。血。色。と。音。と。猜。ま
は。る。実。小。霜。露。の。病。小。ア。を。日。ま。る。瘡。り。あ。べ。れ。豫。て。小。立。共。侶。小。立。去。る。と
契。す。ら。う。も。御。邊。病。臥。の。趣。を。傳。達。の。由。も。あ。れ。け。は。書。起。小。ま。れ。を。猛。小。後
者。と。急。ぐ。客。共。衣。を。整。と。元。四。郎。が。後。者。と。その。宅。旅。亭。の。れ。れ。も。ま。者。病。茶
餌。の。り。ま。も。叮。嚀。ま。心。つけ。別。ま。歸。浴。小。赴。け。り。既。ぬ。元。四。郎。の。後。ま。

るけれども人の世の人のをく。この日の猶も臥せり。叔次の目もろく病者の
 ちを瘥りたりと。後者どおく博労町。粟津屋の赴き。あつ。祥八の對面
 多く姓名を生り来意を告ぐ。阿夏母子は由縁あれが那窮死をるに忍びび
 その故の箇様々々と候。鯖樓中より。阿夏はあひ。絆の趣。渠等が客儀の
 舊借を償へと。且珠之入をも共侶におく。京師の還らんと。是事情
 辯舌爽小演。祥八は多岐びく。いそぐ異議を。特小園主へおせられ。京
 京家の使人より。生口られより。駭死怖れ。を。款待大なる。を。妻も共小
 口誼を。舒て珠之入も。焦々と。報て无四郎の遞与。けり。是より先。珠之入の
 母の阿夏が消息。と。件の夏の趣。箇様々々と。知せ。既小まの。は。ゆるりけり。の
 放生會。小。桶の魚の。讀経を。聽る心地。は。是より。无四郎が。次員。を。肩を
 心。侵り。く。あつ。夫婦の。使れ。を。動も。ま。れ。外。小。ま。て。彼人。遅。と。俟。程。小。果。く。

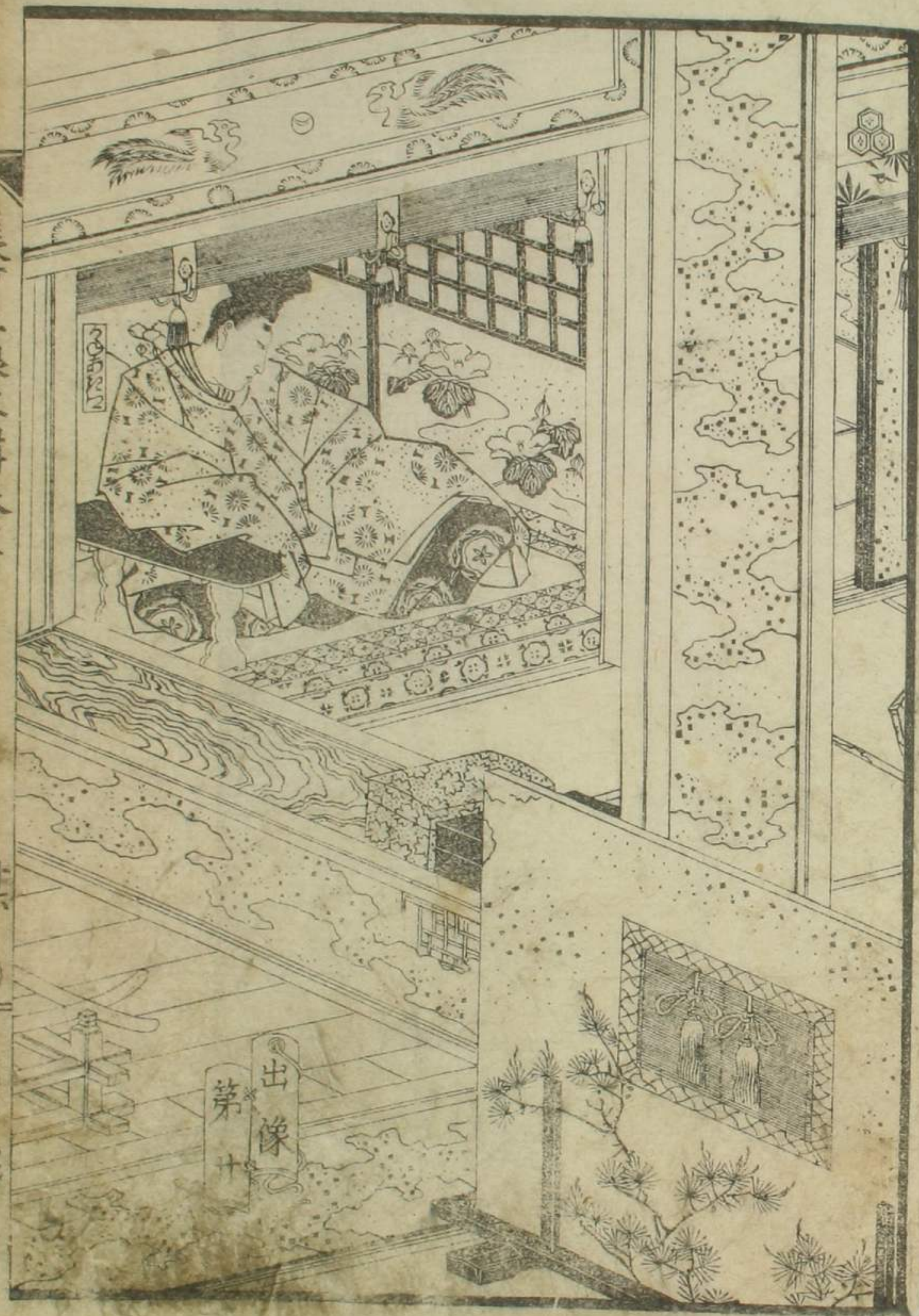
无四郎が来りければ。呼ぶ。随小坐席。を。造り。く。恭。對面。を。當。下。无四郎。を。
 傍。招。近。つ。け。這。面。母親。共。侶。小。京師。へ。伴。んと。来。り。よ。と。懇。心。切。小。説。示
 して。額。髪。を。押。拵。て。相。別。れ。り。十。総。の。儀。が。三。才。の。比。る。け。れ。俺。在。り。も。知。ら
 ず。け。ん。母。も。再。會。せ。折。子。の。儀。も。詳。し。き。日。來。の。艱。苦。を。あ。ん。今。よ。り
 吾。俗。が。後。見。多。く。人。の。為。小。を。掃。せ。下。つ。と。ひ。の。心。を。慰。む。る。愛。々。く。珠。之
 入。の。恩。義。を。感。ず。と。そ。が。俵。儀。侍。り。然。程。小。无四郎。阿夏。が。客。儀。は。舊。借。を
 祥八。の。向。う。金。を。取。ら。せ。別。は。准。備。の。一。封。金。の。二。分。三。分。の。謝。儀。と。し。く。阿
 夏。が。為。り。贈。り。ぬ。も。祥八。の。薄。氣。味。を。さ。ふ。敢。又。これ。を。受。む。客。儀。も。之。分。之
 一。を。輸。り。ぬ。実。を。書。て。遞。与。し。け。り。絆。を。送。る。果。小。无四郎。の。祥八。夫婦。の
 欽。心。を。述。珠。之。入。の。推。し。て。候。鯖。樓。小。赴。き。昨。今。の。首。尾。焦。々と。阿夏。其。其。見
 相。歡。び。主。人。の。沙。金。三。兩。を。贈。り。媒。妁。の。謝。物。と。返。ま。を。思。ひ。こ。の

ありわれ主人の固辞とて必き庖丁は術と盡し酒宴と張て御食成り
 登時わ下の女房も无四郎の對面し阿夏あつ衣の新とて臚とを
 扱のさふわふれ无四郎の多く喫まで不盡と辭し別を生足阿夏珠之次と
 ねと旅亭に還りぬるも町宿よりければぬるのさう後ををる二両固の後者
 あり東西を取らむその意とぬるて忌憚りこまむけり既一艱多彼人に言
 路後まて甲斐のりてめま本意と遂これども女子と伴小旅るれ水行あそ
 よめれとてその日便船を討に浪速へ歸る船ありければその究竟と訪ひて
 次の日旅亭を立去り會共侶の湊に赴れ件の船を乗はける這日毎日
 順風ゆく浪路も障り多きりくばそ浪速津の若者よけり是より阿夏と客
 轎に乗し珠之次と後して翌日京に入る程の五條より多相識許阿夏
 母子を留措く西の君所へぬるまあり帰京のよとゆえぬげりの賢房卿の

使人の陸路ありまはれ無四郎あり日数後れ仲春の初旬ありて京著と
 けれ物大やりの空とるいと悔くを思ひける又无四郎の那地を病著小臥し
 たまごも帰京の日期の後れとて水行を歸まると言ふ毎小順風ありて
 以京優て逸速く帰洛はぬとゆえあはく大内殿の報翰と呈し進せ彼
 君より賜する東西色々披露くその致ひまると言ふ君邊の首尾より
 けりその次の日小兼頭卿の无四郎と召近つて周防の消息を向ひるを
 言の便宜とぬる无四郎の山口をゆき阿夏の再會あり緋云と生口ま
 しく涙の君も知食する二代の名妓ゆひ小太く薄命ある女子ありて今
 よも十稔のまのさる比馴し華洛に住むく鎌倉へを赴く道中山家
 跟られ良人と継子の命を損しその身の珠之次と喚做しる嬰兒を扛抱
 せ辛くも脱れて近江の山里の身を寓り年来其処ゆひるを得身れ

うさ 憂患堪ぢりけん山口の敏基華と傳言く。去歳の春その子と俱に固防の赴
 たりけり。由縁の人も世に去りて盤纏乏竭果の進退其首不究す。無
 柵との橋の上より身を投んとせし折其をたす。薄あつてゐる。心は推し留め
 容子と向へ別人とむむ。相見一京師の歌妓件の夏でひひ。渠は陶興の房
 中の疎くばや。とのあつて君も知食たれ。いと哀れの弥増て意見致盡一
 死に禁めたる子珠之共侶の帰京の船うち乗と。この地の相伴ひひ。さ
 づかれん使を奉りて。又さ陸路る。俱に。共のひひを船中の親疎と
 る。兼合する。勘うね。如右計ひいと。実言虚談うち。雜に密中。生口。さ
 る。兼頭御座のひて。不便多む。が。舊里の親族あや。の夏が。す。る
 り。か。ると。問せ。ひ。京師の渠が故御され。親類も。多。く。渠。の。友。の。あ。つ
 び。と。さ。う。さ。へ。又。夏。が。子。さ。珠。之。共。の。侍。稀。多。美。立。童。あ。つ。年。十二。四。の。や。う。の。ひ。ん

思おもやま。ま。ひ。の。某。が。代。と。と。召。使。せ。の。ひ。さ。あ。つ。彼。身。の。幸。さ。る。も。い。も。財。は
 の。子。さ。の。と。や。上。難。ひ。た。あ。つ。さ。ま。ま。と。兼。頭。卿。と。領。を。ひ。て。今。戦
 國。の。世。の。あ。れ。が。一。藝。の。もの。素。姓。の。よ。う。な。者。亦。さ。る。も。さ。う。な。や。百。子。さ。る
 林。と。く。嫌。ひ。た。の。あ。つ。さ。ま。ま。の。彼。少。年。の。襦。袢。の。中。の。在。り。比。陶。興
 房。が。愛。せ。よ。う。と。い。れ。入。信。の。ま。ま。と。あ。の。量。養。の。固。防。へ。赴。け。り。彼。興。房。が。庇。を。立。ん
 と。あ。の。ひ。も。あ。つ。ら。ん。その。比。左。界。の。戦。ひ。の。興。房。入。水。の。あ。え。あ。れ。彼。以。不
 便。夏。共。侶。の。召。と。ま。ま。密。中。の。渠。の。ま。ま。と。さ。う。な。ま。ま。如。さ。る。が。首。置。さ。る
 け。ら。の。あ。つ。だ。さ。う。の。あ。つ。と。叮。嚀。を。示。し。多。く。無。四。郎。の。致。ひ。面。露。れ。て。言。受
 け。退。出。り。然。れ。辛。踏。无。四。郎。の。目。五。條。へ。消。息。と。君。命。の。趣。を。阿。夏。珠
 の。子。母。ら。告。げ。阿。夏。の。あ。つ。る。珠。之。共。も。致。さ。る。と。大。さ。る。と。俱。に。あ。つ。の。あ。つ。の。あ
 こそ。繕。ひ。て。次。の。目。光。四。郎。が。宿。所。に。来。に。け。り。阿。夏。の。山。口。と。辞。し。去。る。と。死。候。騎



出像
第十

美山金二車卷

十六

美山金二車卷



阿夏の夏
何珠の夏
言多之夏
あ願の夏
の夏

美山金二車卷

美山金二車卷

四八

四九

五〇

樓のありの妻の膳のき贈する小袖を柱まきこれに珠之入の袴もき
元四郎が被登借て長きるを折返し忙し穿せきと結既小
程元四郎の君所ふまありかかと直はまうあか兼頭卿の別室の深
召せぬひよりその古夏のを体録巽亭の酒宴の折中似るるもあせ
掛つたる彼此の翠簾の錦いぬとれも重席簾の上座は彼卿を
たるが最も尊大くええあ阿夏珠之入の畏と額つたるは進み
兼頭卿の頻り招近づく一別以来年劇る夏の恙もあつる
其所へ介れも幸きて良人を喪ひは格魂多近屬他御ありけは
寧成の噂の陶良房と疎くさげんひりあはれ懐舊の情禁
めめつるや汝の産る子の現美に少年の當家に隨身の願ひあ
ととんと下とのありぬと知る如く唐の仕りらるるはあはれ宿

所もあはれされ且くあは留措て左も右もあはれあはれ定む
あはれは優て弱今そのて在りもあはれ女子の摠て素姓あはれ氏な
王のあはれ昔語る日あはれあはれあはれと慰めあはれ切あはれ阿
夏あはれあはれあはれ阿とあはれ平伏果敢あはれあはれ折るあはれ夏
あはれ案内を画壁の下に侍り元四郎急進あはれあはれあはれ御懇命某
あはれ面を涙あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
親類あはれあはれ陸奥あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
某身の暇を賜て故郷へ還る便路あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
珠之入あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれ安心はあはれ須弥あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれ猜しあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

昔里へおとゆえ。妻のまどくさるる。ゆれ初より事情を訝ぐ。あつふ今の
 辭は顯れり。主の使の立ちあがり。女子と俱て。あつふ。大なる。越度る。主の
 この子と。女ね置て。身を振まき。せまき。欲き。伎倆の程を。鈍まれば。結と。罪を
 へ。の。され。今。の。世。の。人。賊。と。忠。信。廉。直。單。を。理。義。を。守。る。古。物。と。唱
 へ。笑。さ。る。の。あ。ま。り。況。這。寧。成。の。年。末。よ。れ。小。仕。今。這。回。の。外。は。徳。を。然。か
 より。渠。が。隨。意。暇。と。取。ら。る。今。ま。ま。ま。の。罪。と。糾。彈。さ。誰。仁。者。の。所。行。と。の
 へ。見。累。小。陶。與。房。が。夏。小。浮。名。の。立。る。を。備。痛。く。ゆ。ひ。今。又。あ。る。の。そ。わ。れ。衆
 人。醉。き。醒。ざ。れ。が。粘。を。舐。る。ふ。ま。ま。と。あ。ふ。と。臆。度。恰。れ。長。袖。の。寛。仁。大。度。隠
 惻。心。を。秘。く。め。め。の。知。れ。も。あ。ら。ぬ。面。色。と。現。寧。成。が。ま。ま。を。廻。夏。が。烏。の
 便宜。ま。ま。む。文。屋。康。秀。が。三。河。椽。か。む。赴。折。小。野。小。町。が。色。衰。と。あ。り。ける。を
 誘。引。と。俱。と。あ。ん。と。い。ひ。る。と。小。町。の。推。辭。と。も。く。い。ぬ。れ。身。と。ら。草。根。と。た。え。

け。そ。水。あ。つ。つ。あ。ん。と。と。あ。ふ。と。よ。ま。て。後。ひ。あ。た。と。物。あ。を。え。る。康。秀。と。寧。成。と。文字。の
 異。れ。訓。似。つ。夏。小。町。の。後。身。秋。の。奇。と。笑。ひ。の。无。四。郎。阿。夏。の。堪。ぬ。さ。ら。か
 且。怕。れ。且。恥。て。又。あ。ふ。の。も。あ。る。け。の。且。く。と。兼。頭。卿。又。无。四。郎。子。宣。争。う。豫。て。の。約束。さ
 る。ふ。ら。汝。身。の。暇。と。取。ら。せ。ん。事。故。御。赴。は。親。の。心。を。慰。め。珠。之。女。の。ま。由。を。
 近。習。の。れ。預。措。ん。有。右。若。夏。が。心。の。安。と。あ。ふ。を。討。ふ。便。よ。ら。ん。寔。小。測。の。再
 會。ま。ま。又。別。れ。る。西。東。都。の。花。月。都。の。月。相。見。る。工。の。難。さ。へ。み。づ。く。愛。と。く
 珠。之。女。が。證。と。目。と。俟。ひ。今。の。由。是。も。寧。成。局。案。内。七。物。を。奪。ま。し。宣。之。河
 夏。の。類。り。の。感。涙。の。進。む。と。袖。小。推。林。が。珠。之。女。共。侶。の。无。四。郎。が。後。小。跟。く。恨。死
 出。る。あ。ろ。の。中。に。兼。頭。卿。の。世。小。稀。る。粹。の。又。粹。粹。中。の。粹。る。君。を。と。感。下。ける。

第十六回
 三碗の清茶暗小元盛を動せ
 一箇の湯鉢克く國友を悦む

幸踏元四郎密成(の)君命(の)首尾(も)不優(て)珠之次(を)留置(せ)その身(の)後(で)願(ひ)の(ま)め(に)致(し)仕(の)暇(を)あ(ら)け(れ)天(の)飲(び)地(の)喜(び)く(阿)夏(を)五(條)の(み)遣(つ)遣(つ)絆(の)障(り)の(ま)ら(ん)程(み)を(き)く(京)師(を)辞(し)去(る)一(と)客(社)衣(を)急(ぐ)准(じゆん)備(も)も(整)ひ(か)弁(頭)卿(み)見(参)り(て)洪(恩)を(謝)し(な)り(朋)輩(を)別(れ)告(ぐ)そ(の)明(日)五(條)は(赴)沓(屬)日(阿)夏(を)預(置)る(相)識(し)東(西)を(贈)り(準)を(お)く(故)御(あ)り(絆)の(趣)を(告)る(を)阿(夏)の(日)の(起)行(を)逆(元)四(郎)の(報)た(を)け(ま)他(事)を(用)意(を)昨(より)俟(ま)り(且)元(四)郎(が)世(才)の(長)の(係)繼(備)足(で)も(後)者(あ)り(て)費(を)多(く)行(簾)驛(々)る(馭)馬(を)肩(り)と(も)を(ま)け(れ)と(尋)思(せ)し(馬)を(牽)き(来)に(け)し(誘)と(俱)び(た)ち(出)け(り)珠(之)次(の)那(日)より(西)殿(弁)頭(卿)の(み)留(り)近(習)の(子)舎(に)在(け)る(垂)妾(時)の(暇)を(賜)や(て)數(の)下(ま)を(送)り(け)り(子)を(教)也(元)親(も)ね(も)阿(夏)の(別)の(悲)し(さ)を(お)も(せ)と

の(と)線(返)し(の)只(云)云(の)果(敢)る(現)生(れ)よ(り)昨(け)の(ま)で(片)晌(も)離(れ)苦(樂)を(俱)し(あ)る(け)母(の)子(を)珠(之)次(も)桓(山)四(鳥)の(懐)ひ(あ)り(哀)々(た)る(涙)の(玉)恋(憐)る(別)の(觴)争(ひ)く(元)骨(肉)の(情)状(言)外(み)見(れ)慰(む)べ(く)も(あ)ら(ず)元(四)郎(諫)將(木)々(遂)に(袂)を(分)け(り)何(時)と(あ)瀨(と)揃(られ)ね(も)親(の)身(も)も(あ)け(て)ち(仰)せ(り)屢(を)え(り)又(送)れる(子)の(身)を(在)る(人)の(霞)に(ち)紛(は)は(れ)遠(く)る(ゆ)馬(の)鈴(の)果(り)ゆ(え)る(ま)で(も)惘(然)と(目)送(り)け(り)凡(人)の(子)た(ら)ぬ(の)親(の)告(を)し(て)取(安)る(非)礼(の)礼(と)の(あ)る(野)合(に)所(を)ゆ(る)男(女)の(情)慾(果)せ(る)現(身)を(捨)る(溝)敷(を)一(の)子(を)棄(る)數(の)下(あり)知(る)も(知)ら(ぬ)逢(坂)の(後)人(話)柄(あ)る(え)の(元)四(郎)阿(夏)ホ(の)話(足)下(に)あ(り)是(より)し(珠)之(次)の(弁)頭(卿)の(第)一(の)近(習)の(弱)輩(に)後(て)日(毎)に(諸)礼(を)見(習)ふ(草)洛(の)夢(の)夢(あ)だ(も)知(ら)ぬ(田)舎(見)の(あ)れ(左)不(就)も(右)不

就ても不敏なる節もめて只笑ふの事と朽をくまらん心を切
 ちまひ習ふま素より愚魯なるべし幾程もく會得たてそのいひさる
 進止まき優美ゆをるのよける是より兼頭卿の珠之奴と召出きて身邊
 近く使ひぬまもまづ主の機を攬て命せられもその意を悟り誨えされ
 どもその義を辨ふ特の怜れ少年なれどもその性便佞利口を進止た
 表裏あり且容貌は柔後めく女子めたる艶色るもその眼中に煞悪を
 帶く角睐睛るも世に異なる善悪邪正の今より料知るは死する
 然どもその者成長をてんぬのふしつら為ふる死倘禍を惹出さる
 ちもあふ肺を唾とも後悔其処ありてんて遠離るる優てあふとと
 心は疎まぬともゆせる愆あるゆめ追出さるる事思ひ煩ひぬひる
 有如之程一日管領高國の權臣小香西四郎左衛門尉元盛と喚る

その京来るべしありて兼頭卿を訪るるをけり元盛が主るわけ
 武藏守高國の民部少輔政春の嫡子なる家老の庶流ることと近
 曾京都将軍家廢立の事ありて管領を補せられよる
 威勢肩を比るものあり家臣より中より件は香西元盛と波野備前
 守植通と柳本彈正忠國友の同胞なり這兄弟三人は丹波一國分領
 多く權威を多く主の高國は減らざる聲言録倉管領の權臣なり長尾
 太田等も世に稱く内管領といひ相似く植通は丹波る八上の御に在城
 元盛と國友の在京して主の執事たり就中國友の初少年なり時容止
 荷々しめりければ高國を寵愛して余を俱みせし夜更る既かく今を
 ち壯年なるたれどもその餘波を寵衰へむ然れどもその年來權を弄
 ひ威を振ひて兄を兄ともせざりて元盛憤りて牆を闚るの懐ひあや

され華洛も戦馬も荒る人食安危を定難く鬼胎を抱く折るれ恨
 秘しと言ふ出さる聊歌を嗜する公卿上達部小親を次負のせよと尋
 思と日野西殿へも疎らるを尋ふ訪まわせ。暗譚の時を根ま日の
 間話休題の日中納言兼頭卿の元盛対面とて譚ひる程の珠之
 次茶の給侍も元盛の薦るに西三圓及び元盛をくく之を平介
 中もいども那少年の従来の扈從達より彼の名を何と召す中ん是ま
 元も孰しうし美童まを火と合せたるを問ませ兼頭卿領に渠を本
 松氏ゆく珠之次と喚れり。譜策のゆけ子ゆあを近屬ま侍せたる
 舊臣寧成といふの由縁あり孤と皆えりか姑くその代とてあふ口措死
 ゆるもの心の思慮するを元も如美童るれ何処され薦遣て武
 弁の家臣あるを元もとせざるふあふれどもいふ便宜とせむ世の薄命あるもの

る元と徹ちふ七報の登時元盛もや。那末松珠之次と申んをヨク得
 元美童るれが主君の薦まうとてその左右の侍を弟國友が權を奪
 ちも究竟の方人るんとて胸小計較る心ともなく膝を進めて賢慮仰の
 ぐるふ在下預を奉まうともめも仕らんあのみ元もえさせめんやと辭せうと
 問するせの兼頭卿欽びく足下の磨ふる代すも渠を執立あつるを死
 彼身の幸ひる。さうとて躬て珠之次を身邊近く呼よそ伴の縛の趣云云
 と説示しあひく汝今より身を未だく香西氏の後にあま在るや八入り漸
 漸に福ひまの勉よめと諭しあひ珠之次の席と避てあはれ卿と元盛も身の
 欽ひを述べけりこれ亦異議のあはるや兼頭卿はもて元盛が乞小の
 任しう其の風めく珠之次を遣志なれと約束せり元盛も欽ひく
 固く契まき退りけり却説末松珠之次の香西が宿所へ赴て身邊近く使

けり元盛陪臣多りといふも丹波數郡の地を食まき且管領の家宰多き
 世ありけりと飲びも漸く心侵りくる意不愜ぬのあれはあさるは執成之罪
 る死を追退け又よく阿諛ありのあれは功を主小薦めく禄増と往りて
 初主の言高國へ進らせぬとあひての言ふ出さぬのれは珠之友まき知るよ
 あし主と不足はあさる。齒を赤紅粉と施し身中綾羅を被飾と過
 人よ捷れ且よく媚て世才あれ元盛いふく寵愛く姑も左右とさるさる
 戦國ノ風俗を男色雜姦の嬉樂に耽らぬのあせせるは珠之友が纏致
 佐利口不湯され惜みのあさるは愛まふ心あつるを放遣さるもあさ
 夜毎小臥房は侍を遂に龍陽小あさりけり現
 意不愜ぬのあさるは元盛の初渠と高國の
 意不愜ぬのあさるは元盛の初渠と高國の
 意不愜ぬのあさるは元盛の初渠と高國の

下風は立んと願ふの必先珠之友は東西を贈り好を締ぐるの執成之頼
 子瑕が衛君小愛せられ節通が漢皇の寵恩を誇りて和漢を差これ
 あるは感溺濫賞異なるは人目覚しきあひけりさるる程小三稔を歴て
 大永五年の夏肆月香西元盛が主多りける管領武藏守高國の四十二元
 厄さるより猛祝髪入道と松岳道永と誦けり。後去路を改め常相といふ
 元盛君所へ出仕し暎昏のゆり来まけりその面色常に
 珠之友誼をくは御館の御剃髪を祝席を
 元盛君の愛を折ゆあさるは元盛の初渠と高國の
 元盛君の愛を折ゆあさるは元盛の初渠と高國の
 元盛君の愛を折ゆあさるは元盛の初渠と高國の

希雲二
好長身備
門尉之慶
の嫡男統
前長輝
入道法隆
をの子下
繁長秀
守元長
子修理大
夫長慶
至の要
すはれ本支
表御行

當館とうかんと同宗どうそうる前管領澄元ぜんくわんていげん主の執吏しやくしの老黨らうたうたるは當館とうかんと
較くらむ退ひきく主ぬしと京師きやうしへ還かへえといゆ。永正十七年えいせいしちねん庚辰かうしんの春正月大軍おほいを催もよほ
多く。遂つひ小京師せうきやうしへ攻せめ登のぼり。一旦勝利いつたんしやうりをたれども。その年暮春とせのよひの比ひに至いたりて三
好このいらいら肩かたて降参こうさんを考かんがへし。その子三好孫四郎さんこうそんしやう長則ながのり茂川孫二郎もがわんそんじやう
長光ながみつホと共侶ともり。郷首きやうしをを列らげられ。を降参こうさんを許容きよようあり。その長ながは及および
たる。當館とうかんの死計しけいひを三好さんこうの黨たう多く怨うらみ。鏃やぶと磨あぐと信まえり。故ゆゑみ
比ひ左界さかいの城しろを敵たか小畧せうりやくられ。四國しよくわんの通路つうろ不便ふべんなる。希雲きうんと不
義ぎの先まへ禿かぶ那な開戦かいせんより前一年まへ。永正十一年えいせいじゆねん。渠みちが為ための君宗きんそうゆく。一隊いつたいの大將たいしやうは
執立しやくたて。淡路守たんろしゆ成春なるはるゆ。我われうけ。天四割てんしよくを滅亡めつわうせし。希雲きうん
居士こし嫡孫ちやくそん。其薩摩守さつましゆ。元長げんちやうの理義りぎを聰とうし。良將りやうしやうられ。私の怨うらみ
必かならず當家とうけと和睦わくふくのありあり。これ比ひ同者どうしやと。あれより。我知われちは

由多ゆた不館ふかん不薦ふせんめなり。阿波あわへ使つかひ遣つかはせ。元長げんちやうを招まねひ。其その美哉みさい哉さい
奉ほうや。彼地かちへ。向むかひ。元長げんちやうの疑うたがひ。這ここ。和議わぎ。美引みひきと
左界さかいの城しろの返かへ。然しかる。其その御方みかたの利りあり。時とき得えが。失うしなひ。易やすし。故ゆゑの佳よき
と。辞ことば。詳しやう演えん。久ひさ館かんの志こころ。領りやうの既すで。許容きよようの面おもて色いろ。年とし末すえ不
和わる。柳本やなぎもと。朋友ともの。議ぎを拒こたへ。説せつ破ぱ。三好さんこうの御家みけ。僕こゝろ等ら
志こころを。今いま。ゆ。腰こしを折より。弱よわき。示しす。や。ある。故ゆゑ。元長げんちやうが。執成しやくじやうする
と。敵たか。不ふ。自みづか。願ねがひ。を食くはせ。主ぬしを賣うり。欲ほむ。救すくふ。あ。ゆ。く。み。と。声こゑ。苛こめ。
く。ま。う。ま。館かんの。彼奴かいつ。或ある。遂つひ。小せう。議ぎを。用もちひ。る。刺さ。目め。を。要よむ。
立た。志こころ。不ふ。も。退ひき。く。他た。人ひと。の。ま。れ。め。あ。れ。弟あに。の。為ため。辱は。れ。と。を。前まへ。所ところ。死し。
懊惱おうなう胸むね。不ふ。満まん。は。息いき。息いき。志こころ。之の。慷かう。慨がい。事こと。あ。い。と。呻う。言ことば。あ。ま。り。長なが。を。
珠たま。之の。以も。ち。愛あい。む。昔むかし。の。同どう。胞ほう。不ふ。和わ。り。頼たの。朝あさ。義ぎ。經けい。を。首くび。と。衆しゆ。人ひと。あ。べ。



けさ
 京畿の武士高松の
 喜くち
 祝髪を拜賀せ

出像第二十一



柳本元正

高松道三郎

高松道三郎

ねれども運の尊卑ふよまき兄の弟及びきく後にも佳きとれり。君同胞然り
 中もあつた。外事を愛り。舎弟彈正四友の内支をのりて。下風を
 職役小甲しるけれ。胞兄弟和睦ありて。内外をま理め。衆人の下風を
 威勢三好の等し。御心づむ。年来不和あり。甚だる。故に
 ひと問れ。元盛駭嘆あり。徳方とえ。舌を潜めて。通微妙も問つ。人の裁
 四友が動まれば。無礼の言も出。定ま。以て。山松と名得る
 湯鉞珠光が遺愛の石物ゆ。家小秘蔵せり。を四友が欲し。てよ
 正屎女の一。婿家相傳する。決てと。けられ。涙あり。痛く恨ま。く
 不快の色を見。是も今。骨肉竟。睡。四友が理を
 ら。と告る。く。珠之。の。然。の。賢慮
 悩。の。速。の。湯鉞。贈。和。睦。の。鳥。辭。の。思。の。其。後

処へ赴。和議。整。の。も。元盛。呵。と。ち。笑。ひ。思。珠。之。天
 地の反覆。ま。と。不義の弟。を。降。て。市。も。親。より。譲。ら。得。が。死
 化貨を贈ら。と。敦。圍。極。の。懲。を。珠。之。又。推。返。と。仰。ひ。世。最
 稀る。黒。迹。道。具。の。を。人。は。誇。ま。と。泰。平。の。宝。の。縮。縮。在
 へ。ゆ。ゆ。大。く。劣。り。て。戦。國。の。要。の。の。あ。ら。ま。贈。り。遣。し。胞。兄。弟。和
 睦。あり。河。波。へ。使。節。を。命。せ。れ。左。界。の。城。を。の。左。界。の。都。會。の。福。地
 也。遠。山。松。の。湯。鉞。より。も。の。利。萬。ま。の。加。旃。三。好。の。黨。恩。義。を。感
 する。と。あ。の。贈。の。の。を。狐。疑。し。く。便。宜。と。失。ひ。御。後。悔。の。や。ひ。ん。
 賢慮を面。の。願。く。と。阿。容。な。る。氣。色。も。く。諫。め。元。盛。有
 理。と。初。く。曉。ゆ。感。む。と。大。く。倍。さ。り。汝。が。意。見。を。の。後。へ。な。れ
 どの。年。る。月。二。八。の。小。孺。子。が。と。四。友。の。説。得。ん。や。と。の。を。微。笑。て。其。近

近世説美少年録第二輯卷之三終

江在在時師の坊後（たうちか）ひく和漢の故事（こた）を粗（わづ）くさるる。武内紀（たけのふみ）の
 年十三（とほ）なり。比天子の密勅（ひみつ）を奉（たてまつ）ると北陸道（きたりく）を巡（めぐ）る麻（あ）の民（たみ）の邪正（よこしま）を向致（むかひ）て治（おさ）め
 めく還（かへ）りまゐりしと云々唐山（たうざん）る秦（しん）の甘羅（かんら）の年甫（とほ）て九歳（くさう）なり。小呂不章（せうりふしやう）が
 為（な）る使（し）と大功（たいこう）を立（た）し。のあり有（あ）如（ごと）く六年（ろくねん）の夏（なつ）少（す）きよむ才（さい）を擇（えら）む任用（にんよう）と
 の氣（き）師説（しせつ）の機（は）を臨（ま）み愛（あい）の心（こころ）と御本意（ごほんい）を達（た）せし胸中（むねぢゆう）に覺（おぼ）えあり桂遣（けいせん）
 し。の心（こころ）と類（たぐひ）の請（こ）めて己（おのれ）が盛（さか）るる盛（さか）るる領（りやう）を年（とし）倍（ばい）するは才幹（さいかん）なり。
 ありと云々のも。つが弟（あとう）の權（けん）を誇（こ）りて人を（ひと）をさると狗子（かうし）の如（ごと）く我意（がいうい）を慕（ほ）りて辯説（べんせつ）と
 よく信（しん）容（よう）をののまると等閑（とうかん）なるを以（も）てと斥（は）けり。盛（さか）るる日（ひ）の湯（ゆ）銚（しやう）を被（か）る包（か）を
 管（くだ）ふ愈（い）めて珠（たま）之（たま）の心（こころ）を齋（い）心（こころ）利（り）て後（のち）者（もの）と云々謙（けん）てを遣（つか）ける。畢竟（ひつじやう）珠（たま）之（たま）
 及び（及び）柳本（りうほん）使（し）し。後の話説（のちのわだせつ）甚（し）麼（ま）を云々。と云々の巻（ま）の解（げ）分（ぶん）を聽（き）録（ろく）なり。
 近世説美少年録第二輯卷之三終 （附四）

